

仙台市文化財調査報告書第381集

富沢遺跡

第144次発掘調査報告書

2011年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第381集

富沢遺跡

第144次発掘調査報告書

2011年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。

富沢遺跡は、仙台市東南部の太白区富沢、長町南、泉崎に広がる面積約90haにおよぶ遺跡です。この地域では昭和50年代の土地区画整理事業やその後の仙台市営地下鉄南北線の開通によって、仙台市南部の拠点となる地域として急速に開発・都市化が進行しています。こうした動きの中で、富沢遺跡では昨年度まで140次を越える発掘調査が実施され、旧石器時代から近世にかけて、連綿と人間の生活の痕跡が残されていることが明らかになってまいりました。特に弥生時代から江戸時代までの水田跡の解明や、それよりさらに古い縄文時代、旧石器時代の人間生活の痕跡の発見などといった大きな成果が得られております。

仙台市では富沢遺跡内に、旧石器時代の森林跡と当時の人々の生活の跡を保存・公開する施設として、「地底の森ミュージアム - 富沢遺跡保存館 - 」を平成8年11月に開館いたしました。以来、当時の自然環境と人々の生活をよみがえらせる展示と、様々な普及活動を通して、広く市民の皆様にご利用いただいているところです。

先人たちの残した文化遺産を保護し、活用しながら永く後世に伝えていくことは、これからの大切なことです。そのためにも当教育委員会では、発掘調査状況の公開・活用を進めるため、調査概要を紹介する広報板の掲示や遺跡見学会の開催など、今後もより多くの市民の皆様に注目いただけるような活動を行っていきたいと考えております。ここに報告する調査成果が、地域の歴史を解き明かしていくための資料として多くの方々に活用され、文化財に対するご理解と保護の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および調査報告書の刊行にあたり、多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げ、刊行の序といたします。

平成23年3月

仙台市教育委員会

教育長 青沼一民

例 言

1. 本書は、共同住宅建設に伴う富沢遺跡第144次調査の報告書である。
2. 発掘調査は、仙台市教育委員会の委託を受け株式会社ノガミが行った。
3. 本書の作成・編集は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課 工藤信一郎、水野一夫の監理のもと株式会社ノガミ 長谷川一郎が担当した。本書の執筆分担は以下のとおりである。
工藤信一郎 第1章第3節
長谷川一郎 第1章第1・2節、第2～5章
4. 整理作業・報告書作成は、株式会社ノガミ亀田営業所にて行った。
5. 野外調査と報告書作成にあたり、ナイス株式会社より協力をいただいた。
6. 調査に関わる一切の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本報告書の土色については、「新版標準土色帖（2002年版）」（小山・竹原：2002）に準拠している。
2. 本文・挿図で使用した方位は全て座標北で統一している。
3. 図中の座標値は、日本測地系の平面直角座標系（X系）に準拠している。
4. 標高値は、東京湾平均海面高度（T.P.）を示している。
5. 挿図縮尺は、全体図：1/100、断面図：1/40を基本としたが、スケール付近にその都度示した。
6. 挿図、その他のスクリーントーン等の凡例は、その都度注釈を加えた。
7. 本文中の「擬似畦畔A」は水田畦畔直上に認められる自然堆積層の高まりを、また「擬似畦畔B」は水田畦畔直下層の上面に認められる高まりを示している（斎野：1987）。
8. 本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田：1980）は、これまでの仙台市域の調査報告や東北中北部の研究から、「十和田a火山灰（To-a）」と考えられている。降下年代は現在、西暦915年と推定されており、本書もこれに従う。
山田一郎・庄子貞雄 1980『宮城県に分布する灰白色火山灰』『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』
仙台市 教育委員会 2000『沼向遺跡第1～3次発掘調査』仙台市文化財調査報告書241集
小口雅史 2003『古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題－十和田aと白頭山（長白山）を中心に』『日本律令制の展開』吉川弘文館

〈本文目次〉

序文

例言・凡例

第1章 遺跡の概要と調査要項・調査に至る経緯

第1節 富沢遺跡の概要.....	1
第2節 調査要項.....	1
第3節 調査に至る経緯.....	1
第2章 調査の方法と経過.....	3
第3章 基本層序.....	4
第4章 検出遺構と出土遺物	
第1節 3層上面.....	7
第2節 4層上面.....	8
第3節 5層上面.....	11
第4節 7層上面.....	11
第5節 9層上面.....	11
第6節 11層上面.....	12
第7節 下層の調査.....	13
第5章 総括.....	14

〈挿図目次〉

第1図 富沢遺跡と周辺の遺跡.....	2
第2図 調査区位置図.....	3
第3図 調査区設置図.....	3
第4図 基本層序柱状図.....	4
第5図 調査区土層断面図.....	5・6
第6図 3層上面平面図・断面図.....	7
第7図 4層上面平面図・断面図.....	9
第8図 4層出土遺物.....	10
第9図 5層上面平面図・断面図.....	10
第10図 7層上面出土遺物分布図、出土遺物.....	11
第11図 11層上面平面図・断面図.....	12
第12図 11層出土遺物.....	13
第13図 縄文時代の調査範囲、出土遺物.....	13
第14図 周辺調査と基本土層対応図.....	14
第15図 3層水田跡と周辺の水田跡.....	15
第16図 4層水田跡と周辺の水田跡.....	15
第17図 5層水田跡と周辺の水田跡.....	15
第18図 11層水田跡と周辺の水田跡.....	15

〈表目次〉

第1表 基本層の土層注記表.....	4
--------------------	---

〈写真図版目次〉

写真図版1 基本層序、調査区遠景、3層.....	19
写真図版2 4・5層.....	20
写真図版3 5・7・9・11層.....	21
写真図版4 11・18層、調査区全景、出土遺物.....	22

第1章 遺跡の概要と調査要項・調査に至る経緯

第1節 富沢遺跡の概要

富沢遺跡は、仙台市の南西部、太白区富沢・泉崎・長町・鹿野等に位置し、水田跡を中心とする総面積約90haに及ぶ広大な複合遺跡である。

遺跡は、名取川と広瀬川に挟まれた沖積地：郡山低地の西半部にある。現在は土地区画整理事業により盛土造成がなされ、大部分は住宅地となっているが、30年ほど前まで一帯は水田として利用されていた。盛土造成以前の旧地形は北西から南東方向に緩やかに傾斜し、標高は約9m～16mである。

富沢遺跡の発掘調査は、1982年以降、現在までに140回を越える調査が継続的に実施されており、弥生時代から近世に至る水田跡が重層的に検出されている。また、弥生時代の水田跡の下層においても、数地点で縄文時代の遺構と遺物が確認されている。さらに1987年～1988年に調査が実施された第30次調査では、縄文時代の遺構面のさらに下層から、旧石器時代の遺構と遺物が発見され、約2万年前の樹木や植物化石、動物の骨、昆虫化石等も多数検出されており、仙台市富沢遺跡保存館（地底の森ミュージアム）において、その保存及び公開がなされている。

第2節 調査要項

遺跡名 富沢遺跡（宮城県遺跡登録番号01369 仙台市文化財登録番号C-301）

所在地 宮城県仙台市太白区泉崎1丁目20-8

調査原因 共同住宅建設に伴う事前調査

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 生涯学習部文化財課

調査指導係主任 工藤信一郎

調査指導係主事 水野一夫

調査組織 株式会社ノガミ

主任調査員（調査）福山俊彰

主任調査員（整理）長谷川一郎

調査補助員（調査）石垣義則

計測員 小熊晋介

調査期間 平成22年5月17日～平成22年7月8日

調査対象面積 462m²

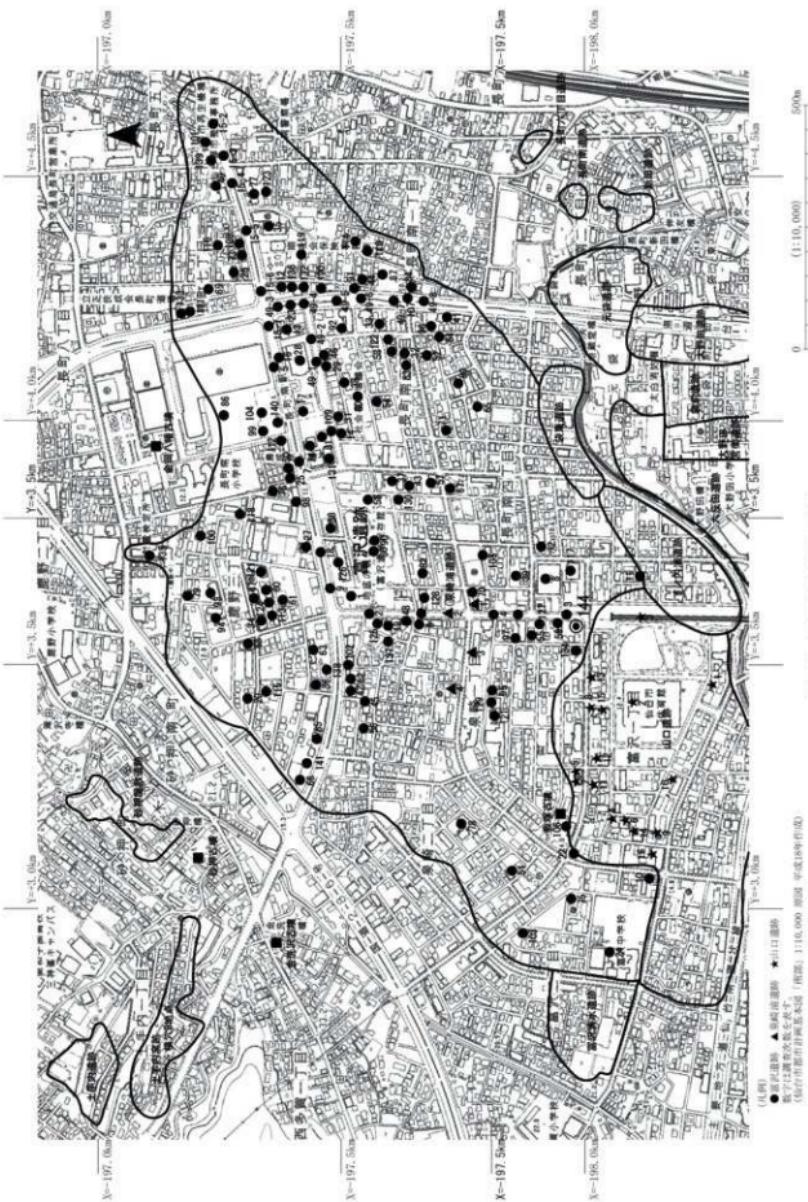
調査面積 105m²

整理期間 平成22年11月8日～平成23年3月11日

第3節 調査に至る経緯

平成21年12月17日付け、ナイス株式会社より富沢遺跡地内の仙台市太白区泉崎1丁目20-8にかかる地区(1090.5m²)について共同住宅建設について協議書が提出された。仙台市教育委員会では本工事がSRC造12階建で、深さ5.3mのベタ基礎工事を伴うことから、富沢遺跡の地下遺構が損なわれると判断し、工事に先立ち本発掘調査を必要とする旨の回答文を平成22年3月12日付けH22教生文第180-25号で送付した。その後発掘調査の実施に向けて、ナイス株式会社の委任を受けた株式会社ASUKA総合計画と協議を行い、ナイス株式会社より発掘届が提出された。仙台市教育委員会では富沢遺跡第144次調査として、同年5月17日より発掘調査を実施した。

第1図 富沢通跡と周辺の遺跡



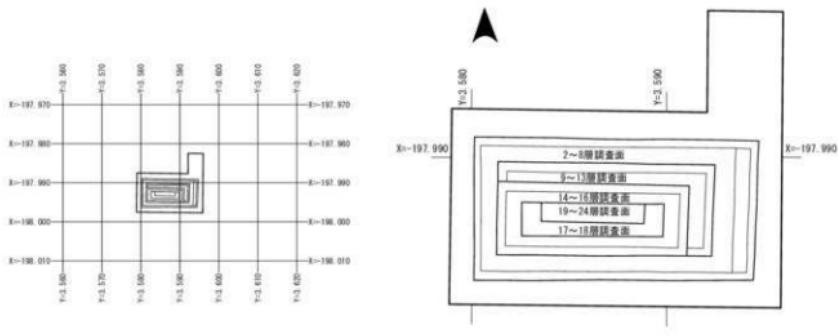
第2章 調査の方法と経過

調査対象地は、仙台市太白区泉崎1丁目20-8に位置する。調査面積は105m²である。調査区の座標は、国家座標（日本測地系）を基準とし、基準点およびB.M.を設置した。測量は、トータルステーションを使用した。写真撮影は、同一カットを35mmモノクロフィルム・カラースライドフィルムとデジタルカメラで撮影を行った。水田跡の認定は、「水田跡の基本的理解—仙台市における水田跡の検出と認定—」『第3回東日本の水田跡を考える会－資料集』（仙台農耕文化勉強会：1990）に基づいている。

現地調査は、平成22年5月17日から開始した。調査区は厚さ約1mの盛土がなされており、これについては安全を考慮し、約45°の傾斜をつけ重機により掘削を行った。近現代の耕作土である1層までは重機により掘削したが、直下に水田跡の存在が予想されたため1層の下部を残し、そこから人力による調査を開始した。調査区内には、土層観察および排水用の側溝を設けた。各層ごとに精査・遺構確認・調査を行い、11層までの調査を終了した時点で、安全対策として、土層観察用の土手、側溝を設け、階段状に掘削し下層の調査を進めた。12層以下は、おもに、縄文時代遺物包含層調査を主眼において調査を行った。最終的に地表面から3.30mまでの掘り下げを行った。平成22年7月8日に現地調査の全日程を終了した。



第2図 調査区位置図

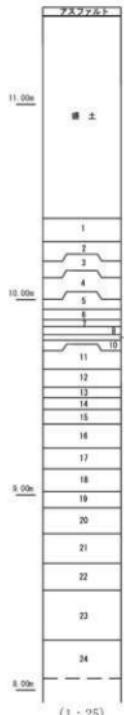


第3図 調査区設定図

第3章 基本層序

調査区内には、区画整理に際して約1mの厚さで盛土がなされていた。今回の調査では、その直下の基本層1層から約2.30m掘り下げ、基本層24層までを確認した(第4・5図、第1表)。

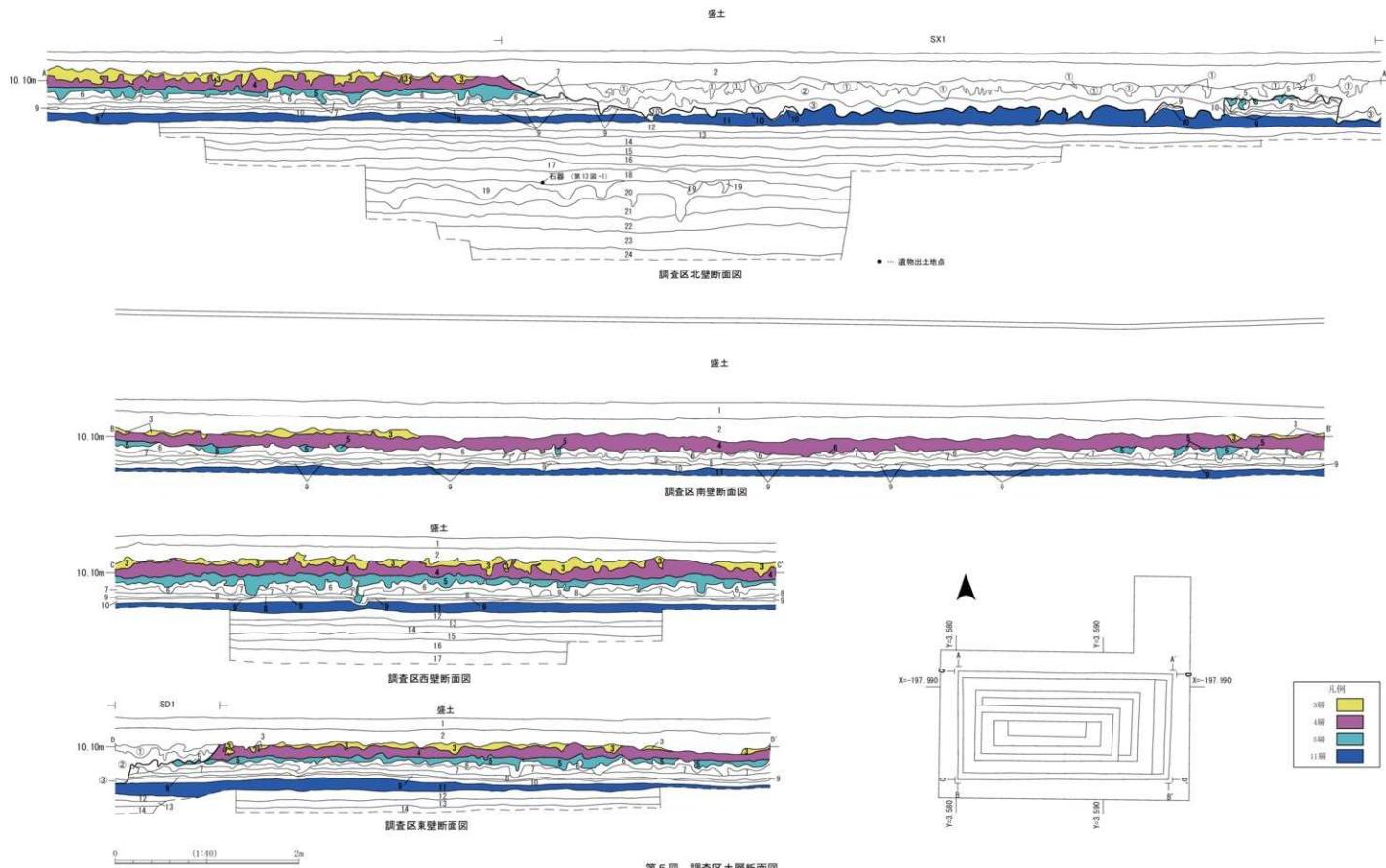
基本層は大別すると1~4層はシルトで、色調は黒色からにぶい黄褐色、5~6層は粘土で、色調は褐色から浅黄色、7~16層は泥炭質粘土で、色調は黒色や黒褐色、17~21層はグラウイ化したシルト質粘土で、色調は黄灰色から緑灰色である。22~24層は砂層で、24層は細砂と粗砂が互層をなしている。4層下面では灰白色火山灰を検出した。この火山灰は、10世紀前半(915年)に降下したとされている。そのため、4層水田跡は同火山灰降下以後の平安時代、5層水田跡は同火山灰降下以前の平安時代である。



第4図 基本層序柱状図

層位	土色	土質	層厚		特徴
			最小	最大	
1	IOYR4/1	褐灰色 シルト	8	21	盛土以前の水田土壤。下面に鉄分の沈着が認められる。
2	IOYR5/1	褐灰色 砂質シルト	5	26	自然堆積層。砂質やや細い。しまりやや細い。
3	IOYR1.7/1	黒色 シルト	0	22	水田土壤。部分的に堆積する。下面に凹凸が認められる。
4	IOYR4/3	にぶい 黄褐色 粘土質シルト	4	23	水田土壤。全域に堆積し、特に調査区南側では厚く堆積する。均質。3層の耕作の影響により、上面の凹凸が顕著。 下面に凹凸が認められるものの、上面と比べると弱い。 下面には灰白色火山灰が小プロック状にわずかに混入する。
5	IOYR5/1	黒色 粘土	0	20	水田土壤。調査区西側では堆積層。王に7層土がマーブル状に混入。 下面に凹凸が顕著に認められる。深いものでは11層上面にまで至る。 モモの根子出土。
6	IOYR8/4	浅黃色 粘土	0	13	自然堆積層。全域に分布する。 5層の耕作の影響により、上面及び下面に凹凸が認められる。
7	IOYR2/2	黒褐色 泥炭質粘土	0	11	自然堆積層。全域に分布する。6層よりしまり弱い。 5層の耕作の影響により、上面及び下面に凹凸が認められる。 土器(土師器)片が、調査区西側で部分的に多くて出土する。
8	2.5Y3/1	黒褐色 泥炭質粘土	0	7	自然堆積層。全域に分布する。7層より色調濃い。 黒褐色土と黄褐色土が薄く縦緻に堆積する。 部分的に5層の耕作の影響により、わずかに凹凸が認められる。
9	IOYR4/1	灰褐色 泥炭質粘土	0	6	自然堆積層。 全域で分布するが、層厚がなく、堆積が認められない部分もある。
10	IOYR1.7/1	黒色 泥炭質粘土	2	7	自然堆積層。全域で分布。下面の色調がやや明るい部分もある。
11	IOYR3/2	黒褐色 泥炭質粘土	1	22	水田土壤。赤土生土出土。
12	7.5YR3/1	黒褐色 泥炭質粘土	6	12	自然堆積層。6層より色調やや暗い。 調査区東側に向かって、10層との境線が不明瞭となる。
13	IOYR3/2	黒褐色 泥炭質粘土	5	12	自然堆積層。灰白色粘土が混入し、層下部に断岩に認められる。
14	IOYR2/1	黒色 泥炭質粘土	3	12	自然堆積層。13層より色調暗い。細かな植物遺体多量。
15	IOYR3/2	黒褐色 泥炭質粘土	5	13	自然堆積層。14層に土質だが、植物遺体の混入量が少で分離した。 14層より色調やや明るい。14層より植物遺体多い(横で重複)。 混入する植物遺体は、形状が大きく、植物の繊維がはつき残る。
16	IOYR3/1	黒褐色 泥炭質粘土	6	15	自然堆積層。 15層より色調やや明るい。植物遺体が混入するものの、15層より少ない。
17	2.5Y4/1	黄灰色 シルト質粘土	3	15	自然堆積層。16層とは土質が異なり、シルト質が強く、しまり強い。
18	2.5Y6/1	黄灰色 シルト質粘土	10	14	自然堆積層。 石礫1点が出土。17層と土質似るが、17層よりシルト質がやや強い。
19	2.5Y4/1	黄灰色 シルト質粘土	0	19	自然堆積層。部分的に堆積し、下面が乱れる。18層より色調やや暗い。
20	5BG6/1	青灰色 シルト質粘土	4	39	自然堆積層。17~19層と比べて、酸化による鉄分の赤化が著しい。 下面が部分的に乱れる。
21	10GB6/1	綠灰色 シルト質粘土	0	28	自然堆積層。20層と土質近似するが、20層より砂質やや強い。 20層全体に酸化による鉄分の赤化が著しい。
22	5BG6/1	青灰色 細砂	10	19	自然堆積層。細砂が主体となる層。植物遺体は少量混入。
23	5BG6/1	青灰色 細砂	18	34	自然堆積層。22層と土質近似するが、22層より植物遺体の混入が少ない。
24	5BG6/1	青灰色 粗砂	-	-	自然堆積層。22~23層より粒形がやや大きい粗砂が主体となる。 部分的に細砂と粗砂が互層をなす。

第1表 基本層の土層注記表



第5図 調査区土層断面図

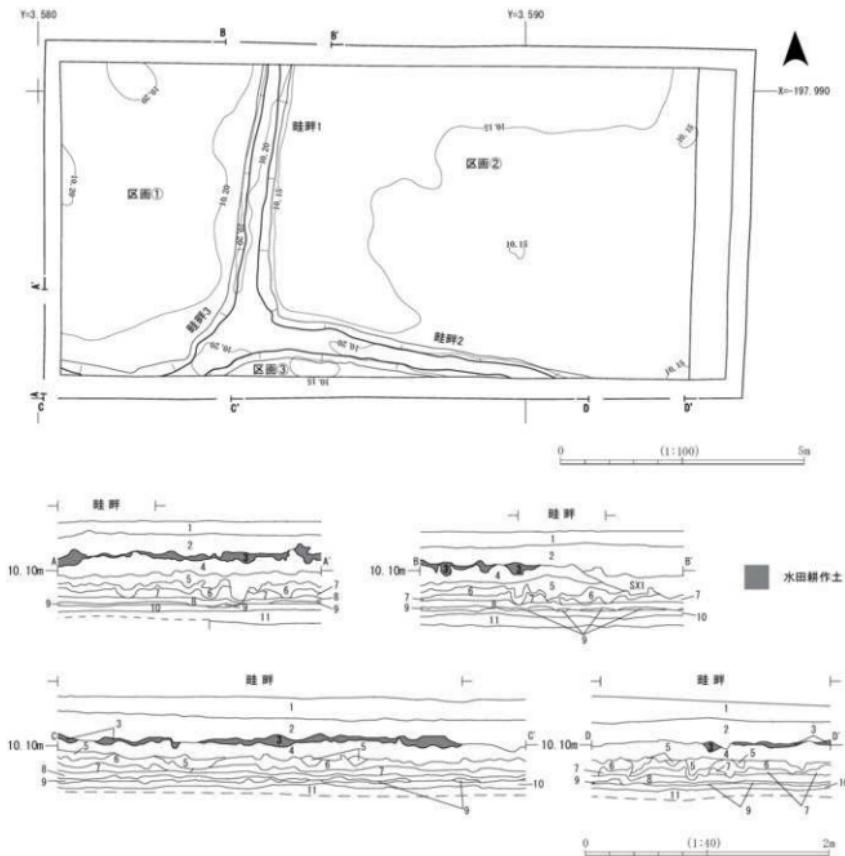
第4章 検出遺構と出土遺物

遺構は、基本層3層、4層、5層、11層を水田土壌とする水田跡と、基本層4層上面で性格不明遺構1基を検出した。遺物は基本層4層、7層、11層、18層から計32点が出土した。出土遺物から4層は平安時代、11層は弥生時代と考えられる。18層中からは石鐵1点が出土しており、縄文時代の遺物包含層と考えられる。

第1節 3層上面

3層水田跡（第6図、写真図版3）

東西方向と南北方向の畦畔3条と、これらによって区画される水田区画を3区画検出した。



第6図 3層上面平面図・断面図

《層の特徴》水田土壌は黒色のシルトである。部分的に、上位の基本層2層が深いところでは分布していない。層厚は10cm前後である。層下面是耕作による起伏がある。

《畦畔》畦畔の高まりは、2層を掘り下げていく過程で確認されたが、場所によっては層自体の遺存が不良のため、2層直下ですでに4層が露出する箇所も存在した。畦畔1は上端幅25~41cm、下端幅47~89cm、高さは区画①との比高差で1~3cm、区画②との比高差で6~7cm、主軸方向はN-6°-Eである。畦畔2は上端幅24~42cm、下端幅43~80cm、高さ2~5cm、主軸方向はN-80°-Wである。畦畔3は畦畔1・2の交差する地点から、南西方向に湾曲して西方へ延びている。上端幅40~79cm、下端幅99~113cm、高さ1~3cm、主軸方向は畦畔1・2付近でN-52°-E、北壁西端でN-82°-Wである。

《水田区画》区画①は3.8×6.0m以上、標高10.21~10.18mである。区画②は6.0×8.0m以上、標高10.16~10.11mである。区画③は調査区南壁と畦畔2・3の間の狭い範囲であり、標高10.15m前後である。

《出土遺物・時期》遺物の出土はない。水田跡の時期は、基本層序の灰白色火山灰の層準との関係から、10世紀前半以降である。

第2節 4層上面

4層水田跡（第5・7・8図、写真図版2・4）

東西方向と南北方向の畦畔4条と、これらによって区画される水田区画を4区画検出した。

《層の特徴》水田土壌はにぶい黄褐色土の粘土質シルトで、調査区全面に広がる。層厚は16cm前後である。一部、層下面で灰白色火山灰が小ブロック状に分布していることを確認した。

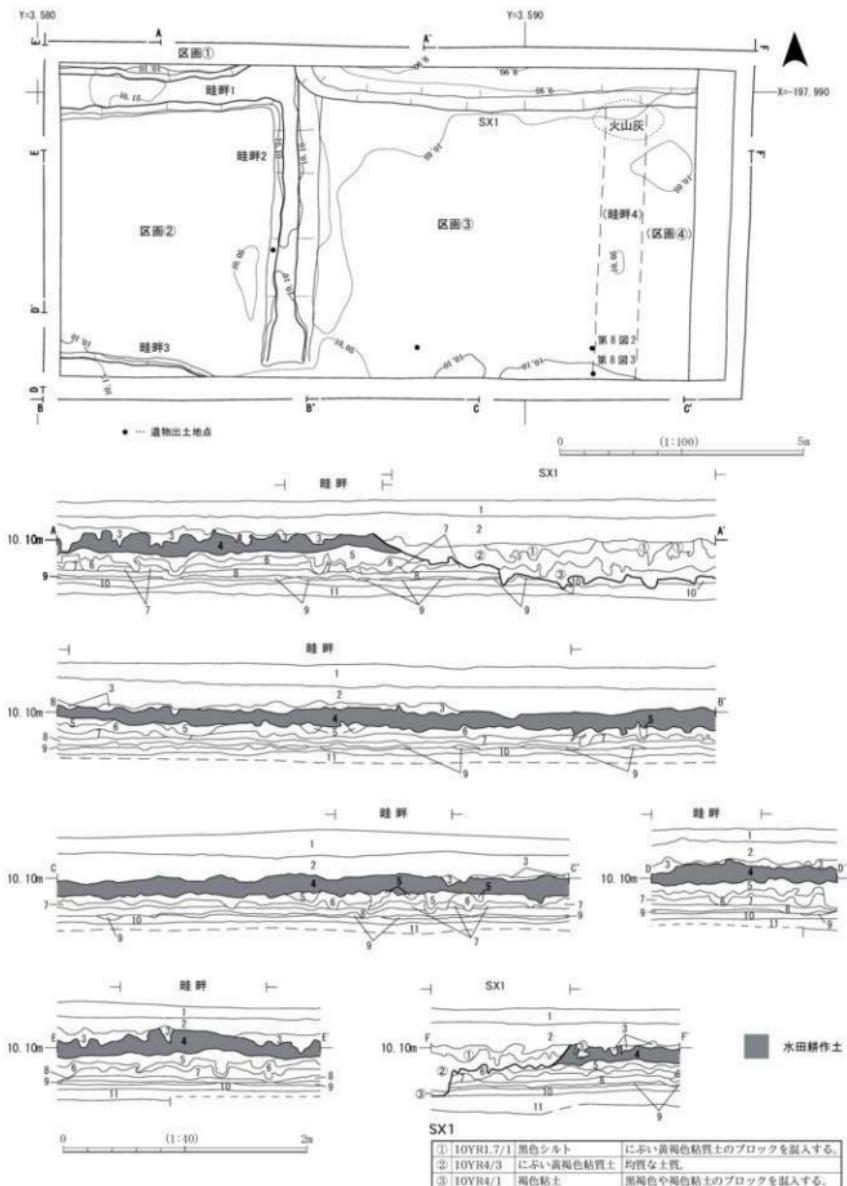
《畦畔》畦畔の高まりは、3層を掘り下げていく過程で確認された。畦畔1は上端幅49~70cm、下端幅81~112cm、高さ1~6cm、主軸方向はN-89°-Eである。畦畔2は上端幅30~72cm、下端幅71~98cm、高さ4~9cm、主軸方向はN-3°-Eである。畦畔3は、その北半が調査区南壁面に平行して検出され、高さ5~7cm、主軸方向はN-84°-Wである。畦畔4は明瞭な高まりとしては捉えられなかったが、灰白色火山灰が帶状に分布する状況が見られた。また、南壁の土層断面に4層の高まりがあり、これらの地点を結んだラインを畦畔と想定し、図面上に破線表示した。想定できた幅は85cm前後、主軸方向はN-8°-Eである。

《水田区画》区画①は畦畔1と調査区北壁との間のわずかな平坦面で、標高10.10~10.06mである。区画②は4.0×5.0m以上で、標高10.10~10.05mである。区画③は5.0×5.4m以上、標高10.11~10.03mである。区画④は検出範囲が限られ、標高10.10~10.05mである。

《出土遺物・時期》遺物は土師器壺片3点で、区画②の南寄りの耕作土上面から1点（第8図1）、区画③の耕作土上面から1点（第8図2）、畦畔2下から1点（第8図3）が出土している。1はロクロ使用の土師器壺の底部片で、底面には糸切り痕がある。2・3は土師器壺で内面は黒色処理されている。水田跡の時期は、灰白色火山灰の検出状況や出土遺物から同火山灰降下以後の平安時代と考えられる。

性格不明遺構（第5・7図、写真図版2）

調査区の北壁際に壁面に平行して性格不明遺構（SX1）が4層上面で検出された。（土層断面：第5図）。4層水田跡と新旧関係があり、それより新しい。遺構の北半は調査区外で、全容は不明である。断面では底面は基本層11層まで達し、起伏がある。検出された範囲での幅は26cm前後、北壁断面で確認した深さは38cm前後である。全体の平面形は不明であるが、堆積土①層～③層は、それぞれ下面に凹凸が認められる特徴があり、性格としては、耕作に関わる可能性がある。

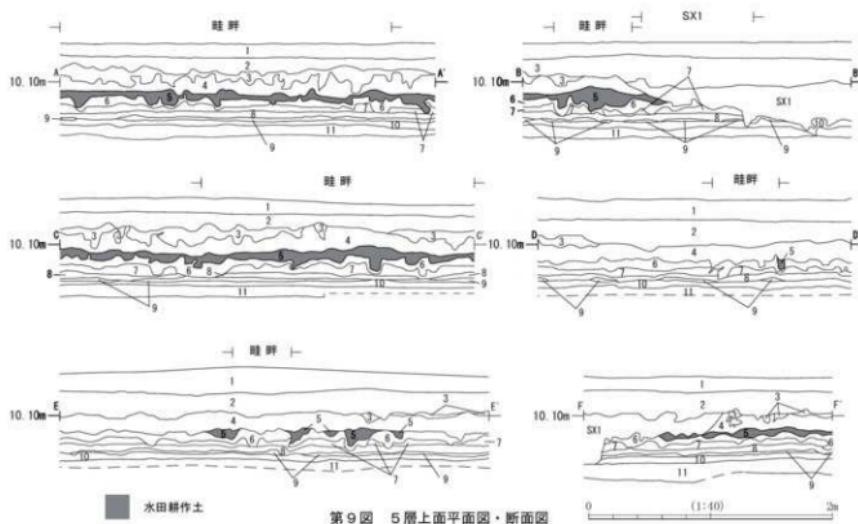
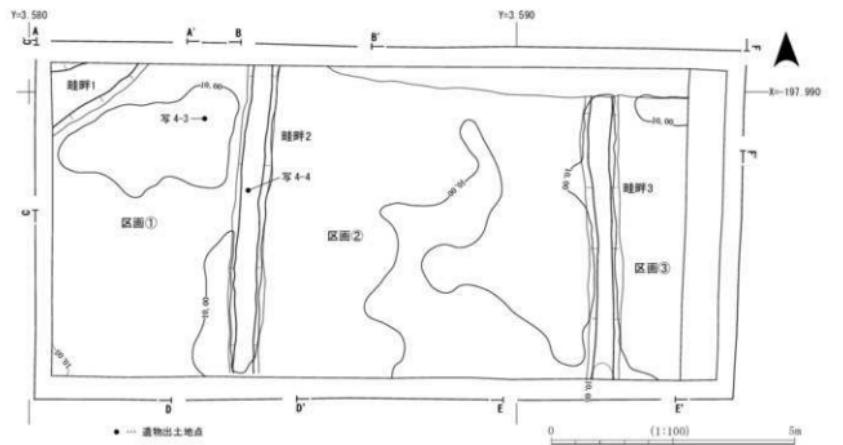


第7図 4層上面平面図・断面図



遺物番号	資料番号	層位	種別	沿梯	部位	法線(cm)			外側調整	内側調整	備考	写真図版
						口径	底径	高さ				
1	E-1	4層	土器	环	底	—	(5.8)	—	底:回転糸切り無調整	口クロ調整	4	
2	D-1	4層	黑色土器	环	口縁~体	(14.4)	—	—	口クロ調整	ヘラミガキ	内面黒色処理	4
3	D-2	4層	黑色土器	环	口縁~体	(14.2)	—	—	口クロ調整	ヘラミガキ	内面黒色処理	4

第8図 4層出土遺物



第9図 5層上面平面図・断面図

第3節 5層上面

5層水田跡（第9図、写真図版2・4）

南北方向と南西-北東方向の畦畔3条と、これらによって区画される水田区画を3区画検出した。

〈層の特徴〉水田土壌は褐色の粘土である。調査区の西寄りでは安定した分布を示すが、調査区中央の南端部付近ではほとんど分布していない。層厚は6cm前後と薄い。層下面是起伏が激しい。

〈畦畔〉畦畔の高まりは、4層を掘り下げていく過程で確認された。畦畔1は調査区の北西端で一部が検出されている。検出された範囲での上端幅は71~92cm、高さ3~4cm、主軸方向はN-58°-Eである。畦畔2は上端幅38~45cm、下端幅60~75m、高さ3~4cm、主軸方向はN-3°-Eである。畦畔3は上端幅28~45cm、下端幅62~81cm、高さ1~5cm、主軸方向はN-1°-Wである。

〈水田区画〉区画①は3.4×6.0m以上で、標高10.05~9.99mである。区画②は6.0×6.2m以上で、標高10.00~9.97mである。区画③は標高9.97m前後である。

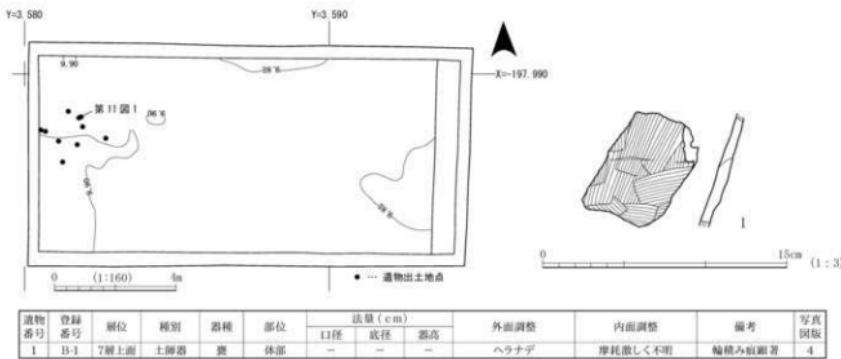
〈出土遺物・時期〉遺物は水田面からモモの種子4点（写真図版4-1~4）が出土している。水田跡の時期は、4層下面で灰白色火山灰が検出されていることから、同火山灰降下以前の平安時代と考えられる。

第4節 7層上面

7層上面出土遺物（第10図、写真図版3・4）

〈層の特徴〉黒褐色の泥炭質粘土で、黄褐色の粘土をブロック状に混入している。層厚は5cm前後と比較的薄い。おおむね調査区全面に分布している。層の下面是起伏が少なく比較的安定している。層の上面の標高は9.93~9.84mで西から東へと下がっている。

〈出土遺物・時期〉調査区西寄りから土師器甕片19点が出土している。大半が小片であるが、このうち土師器甕の体部片1点（第10図1）を掲載した。出土した遺物が甕胴部片のみのため、詳細な時期は不明である。



第10図 7層上面出土遺物分布図、出土遺物

第5節 9層上面

基本層9層は、褐灰色の泥炭質粘土である。層厚が6cm以下と薄く、調査区全域に堆積するものの、部分的に分布しない箇所もある。9層上面の調査では、水田跡は検出されなかった。後に、調査過程の写真を整理しているときに、畦畔状のプランを確認した（写真図版3-6）。畦畔状に見える部分は周囲よりも色調が暗い様子がうかがえる。

第6節 11層上面

11層水田跡（第11・12図、写真図版3・4）

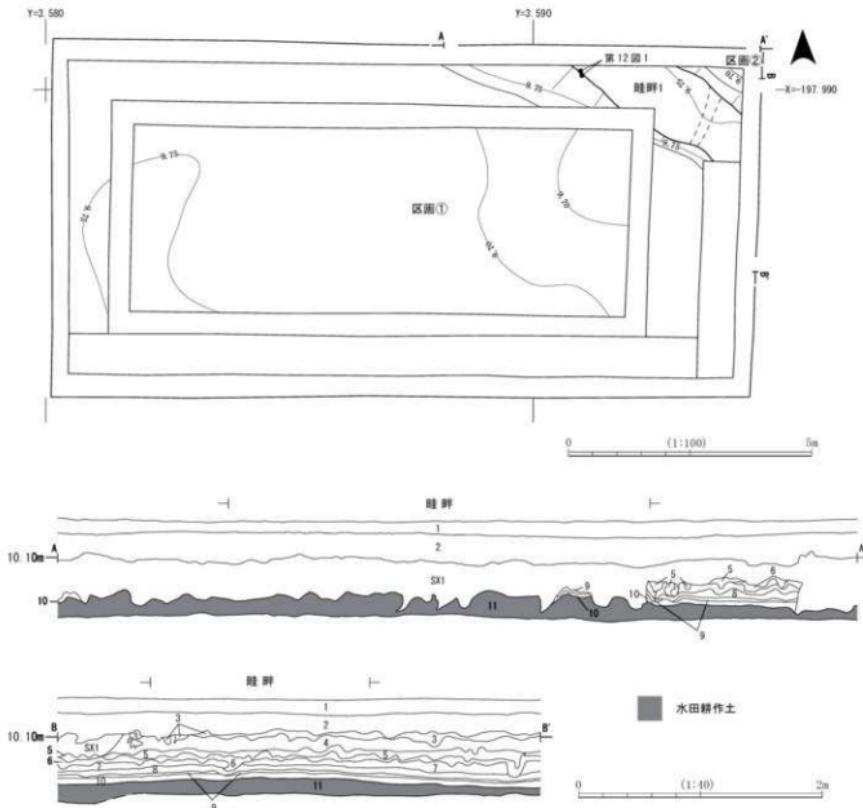
本来の11層調査範囲内で畦畔は検出されなかったが、後日、東端の作業路としてベルト状に残していた部分を掘り下げるところ、調査区の北東隅で北西—南東方向の畦畔1条を確認した。

〈層の特徴〉 水田土壌は黒褐色の泥炭質粘土で、調査区全面に分布している。耕作土の層厚はおおむね10cm前後である。層下面是、比較的起伏が少ない。

〈畦畔〉 畦畔1は調査区の北東に検出された幅の広い畦畔である。畦畔上端幅64～76cm、下端幅185cm前後、高さ6cm前後、主軸方向はN-56°-Eである。畦畔には、直交して溝状の落ち込みが確認されており（点線部分）、水口の可能性が考えられる。幅は約22cmである。

〈水田区画〉 区画①の標高は9.75～9.70mである。区画②は畦畔1の北側に検出されたわずかな部分で、標高は9.70m前後である。

〈出土遺物・時期〉 調査区北東の北壁際から、弥生土器の体部片1点（第12図1）が出土している。水田跡の時期は、弥生時代と考えられる。



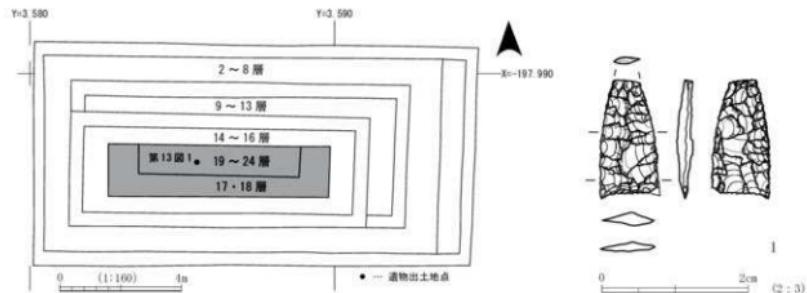
第11図 11層上面平面図・断面図



第12図 11層出土遺物

第7節 下層の調査

14層以下については、縄文時代の遺物包含層の検出に主眼において調査を行った（第5・13図、写真図版4）。その結果、包含層は確認されなかつたが、18層中から縄文時代の石鏃1点（第13図1）が出土した。第13図1は、先端部および下端の一部を欠損している。石材は珪質頁岩である。調査は、現地表面下約3.30m、基本層24層まで行ったが、他の層で遺構・遺物は検出されなかつた。



第13図 縄文時代の調査範囲、出土遺物

遺物 番号	登録 番号	層位	種別	源種	法量(cm)			重量 (g)	石材	母岩	打面 形状	自然面	備考	写真 図版
					長さ	幅	厚さ							
1	K-1	18層	打製石器	石鏃	(3.7)	(1.8)	(0.5)	2.9	珪質頁岩	-	無			4

第5章 総括

今回の富沢遺跡第144次調査では、基本層3層、4層、5層、11層を水田土壌とする水田跡と、4層上面で性格不明遺構1基が検出された。遺物は32点出土している。そのうち、下層の調査では基本層18層から石鐵1点が出土している。

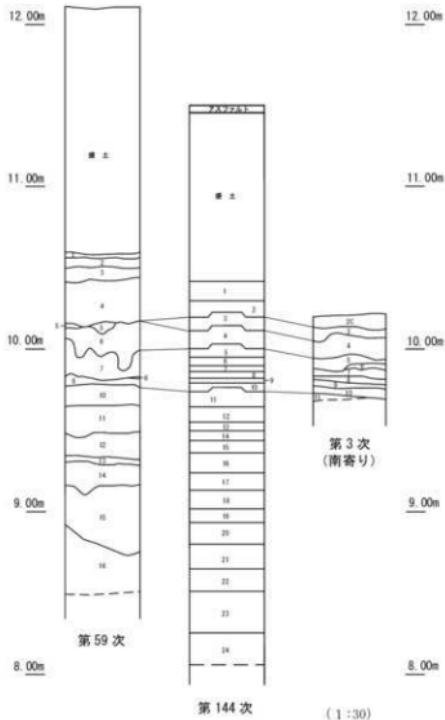
調査区は、遺跡の南部A地区（佐藤1991b）に位置し、各水田跡の時期は、これまでに行われた周辺調査区との基本層序の対応関係（第14図）から、以下のように考えることができる。

3層水田跡 基本層3層は灰白色火山灰を含む基本層4層上位にある。周辺調査区では、第3次調査3層や第59次調査5層などに対応する。これらの層は富沢遺跡南部A地区基本土層4層にあたり、所属年代は中世と考えられる。3層水田跡で検出した南北方向の畦畔は、平安時代と考えられる4層水田跡で検出した南北方向の畦畔と比べて、やや東へ振れる特徴がある。

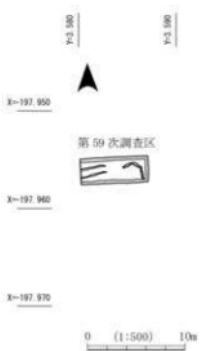
4層水田跡 基本層4層には灰白色火山灰が含まれ、周辺調査区では、第3次調査4層や第59次調査6層などに対応する。これらの層は富沢遺跡南部A地区基本土層5層にあたり、所属年代は灰白色火山灰降下以降の平安時代と考えられる。

5層水田跡 基本層5層の上位には灰白色火山灰を含む基本層4層が堆積する。周辺調査区を見ると、第3次調査5層や第59次調査7層などに対応する。これらの層は富沢遺跡南部A地区基本土層6層にあたり、所属年代は灰白色火山灰降下以前の平安時代と考えられる。

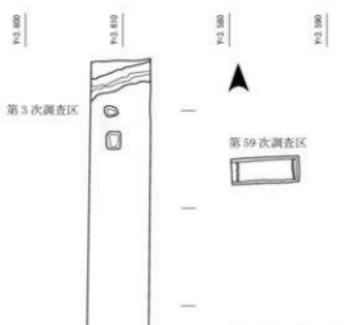
11層水田跡 基本層11層は黒褐色の泥炭質粘土で、弥生土器が1点出土している。周辺調査区を見ると、第3次調査11層や第59次調査10層などに対応する。これらの層は富沢遺跡南部A地区基本土層12層にあたり、所属年代は弥生時代中期（楕円開式期）と考えられる。なお、第3次調査では畦畔が1条検出されており、第59次調査では水田土壌が確認されているのみである（第18図参照）。この時期の水田跡については、今後の資料の増加を待つて、再度検討する必要があろう。



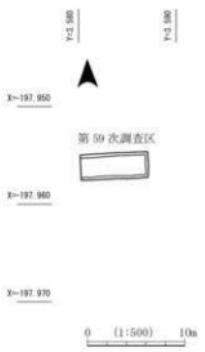
第14図 周辺調査との基本土層対応図



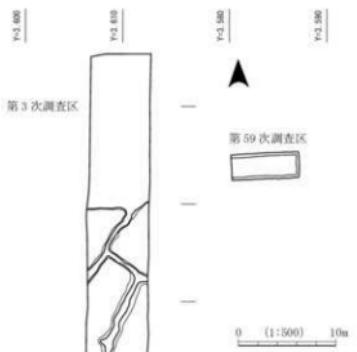
第15図 3層水田跡と周辺の水田跡



第16図 4層水田跡と周辺の水田跡



第17図 5層水田跡と周辺の水田跡



第18図 11層水田跡と周辺の水田跡

〈引用・参考文献〉

- 太田昭夫・中富 洋 1995 『富沢・泉崎浦・山口遺跡（8）－富沢遺跡第88次・89次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第203集
- 工藤哲司他 1984 『富沢水田遺跡 第1冊・病院建設に伴う泉崎前地区の調査報告書』仙台市文化財調査報告書第67集
- 森野裕彦 1987 「第7章 検出された遺構と遺物 第1節 遺構の種別と遺物の分類」『富沢－仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴なう富沢遺跡
第15次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第98集
- 佐藤甲二 1988 『富沢遺跡－第28次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第114集
- 佐藤甲二 1991a 「第2章第3節 富沢遺跡第59次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）』仙台市文化財調査報告書152集
- 佐藤甲二 1991b 「第4章 富沢地区基本層序案・層位対応關係案」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）』仙台市文化財調査報告書152集
- 仙台農耕文化勉強会 1990 「水田路の基礎的理－仙台市における水田路の検出と認定－」『第3回東日本の水田路を考える会－資料集－』
- 主演光朗・伊藤雅和 2008 『富沢遺跡－第141次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第322集
- 真山 恵・菊池逸夫・鈴木真一郎 1988 『富沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第129集
- 吉岡泰平 1989 「IV 泉崎前・泉崎浦地区」『富沢遺跡・泉崎浦遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ－』仙台市文化財調査報告書126集

写 真 図 版



1. 基本層序（北壁断面）



2. 南壁断面



3. 西壁断面



4. 調査区遠景 南西から



5. 3層水田跡確認状況 南西から



6. 3層水田跡接出状況 西から



7. 3層水田跡鉢検出状況 南から

写真図版 1 基本層序、調査区遠景、3層



1. 4層水田跡確認状況 北西から



2. 4層水田跡検出状況 南東から



3. 4層水田跡畦畔検出状況 南から



4. 4層SX1検出状況 北西から



5. 4層灰白色火山灰検出状況 北から



6. 4層遺物出土状況 北から



7. 5層水田跡確認状況 北から



8. 5層水田跡検出状況 南西から

写真図版2 4・5層



1. 5層水田跡畦畔検出状況 南から



2. 5層水田跡畦畔検出状況 南から



3. 7層上面遺物出土状況 北西から



4. 7層上面遺物出土状況 西から



5. 7層上面遺物出土状況 東から



6. 9層上面確認状況 東から



7. 11層上面確認状況 東から



9. 11層水田跡畦畔検出状況 東から

写真図版3 5・7・9・11層



1. 11層遺物出土状況 南から



2. 18層遺物出土状況 西から



3. 調査区全景 西から



4. 調査区全景 南東から



第8図1



第8図2



第8図3



第10図1



第12図1



第13図1



0 2cm
(モモの種子)

写真図版4 11・18層、調査区全景、出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とみざわいせき						
書名	富沢遺跡						
副書名	第144次発掘調査報告書						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第381集						
編著者名	工藤信一郎、水野一夫、長谷川一郎						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区二日町1丁目1 電話 022-214-8839						
発行年月日	2011年3月11日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
富沢遺跡 第144次	仙台市太白区 泉崎1丁目 20-8	41009	01369	38° 13' 09"	140° 52' 15"	20100517 ～ 20100708	105 共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
富沢遺跡 第144次	包含地 水田跡	縄文時代 弥生時代～中世	水田跡	石器 土師器・弥生土器			
要約	<p>富沢遺跡は、標高9～16mの後背湿地に立地する。昭和57年から調査が行われ、弥生時代以降の水田跡が重層的に検出されている。さらに、縄文時代及び旧石器時代の遺構・遺物も確認されている。</p> <p>今回の第144次調査では、3層水田跡（中世）、4層水田跡（平安：10世紀前半以降）、5層水田跡（平安：10世紀前半以前）、11層水田跡（弥生中期中葉）の4時期の水田跡を検出した。</p> <p>水田跡調査後に、現地表面下約3.30m、基本層24層までの調査を行ったが遺構は検出されなかった。</p> <p>遺物は、基本層4層から土師器壺、7層から土師器甕、11層から弥生土器、18層からは石繖が出土した。</p>						

仙台市文化財調査報告書第381集

富沢遺跡

—第144次発掘調査報告書—

2011年3月

発行 仙台市教育委員会

宮城県仙台市青葉区二日町1丁目1

文化財課 022-214-8839

印刷 株式会社 ライフ

千葉県成田市東和田595

0476-24-1564